-It's happy days-
How to Raise a
Well-Behaved Beasts

[How to Raise a Well-Behaved Beasts]

1

梅雨時の霧雨が空を漂うある日の朝、創聖学院一般学部（スライトリー）の学舎の一隅で。

「ねえねえ、ユウ。まろまろがバイト始めたって話、ホント？」

泉戸裕理がレインコートを畳みつつ講義室の扉を潜ったとたん、先に登校していた河合アメリがそんなことを問いかけながら駆け寄ってくる。

同時に裕理は、自分の背中に他の男子生徒の視線が突き刺さるのを痛いほど感じていた。裕理にとっては腐れ縁の幼馴染に過ぎなくても、アメリは顔もスタイルも十人並み以上の立派な美人なのだ。ただ彼女と話をするだけで、互いの息がかかるほど近くにいるだけで、羨望と嫉妬の目を向けてくる男子生徒は決して少なくなかった。

それでも以前の裕理なら、我関せずを貫いて無視できたのだが。

「お前、なあ……」

もう少し距離を取れ、男と女の節度を保て、せめてお早うの挨拶をしてから本題に移れ。そんな文句が喉を突いて出そうになる。今の裕理は妻帯者だから、どうしても周囲の目が気になってしまうのである。

妻のましろは女子学部（フローレス）に通っているから、日中、裕理と離ればなれにならざるを得ない。幸い夫婦仲は順調そのものだけれど、「いつも一緒のアメリさんが羨ましい」だの「お昼休みくらいは一般学部（スライトリー）に行きたい」だのと冗談半分の焼き餅を焼かれるのは日常茶飯事だ。いくら女心に疎い裕理でも、幼馴染との距離感を考え直す気になろうというものだった。

しかし、そんな内情をアメリの前で語ってしまえば「何それ、ノロケ？」だの「独りモンのあたしに対するイヤミ？」だの言われた挙げ句、最後には「くやしいから友達みんなに言いふらしてやる！」と、面白おかしな尾ひれをつけた上で話のネタにされるのは目に見えている。

「……まあ、いいや」

結局、裕理はいつも通りの体を装いつつ席に着き、そのままアメリの話を受けることにする。

「しかし、相変わらず情報早いな。誰から聞いたんだ？」

「蘭ちゃんから。さっき廊下ですれ違った時に」

よりによって一番知らせたくない奴に何故話すのか。裕理は見慣れた学活担任（チューター）の顔を思い浮かべつつ、こっそりと舌打ちする。

「まあ、別に隠す気はなかったし、話すくらいはいいか……。えっと、一ヶ月限定の短期雇用なんだけど、女子学部（フローレス）からも許可もらってさ、先週から働き始めたところなんだ」

「何でさ？　まろまろって小遣い欲しがるようなコじゃなくない？　ていうか、女子学部（フローレス）ってバイトOKなの？　あそこ、ホントはガッコの外に出るだけでも許可いるんでしょ？」

「一度に二つも三つも質問飛ばしてくるなよ、どれから答えりゃいいんだ？」

「全部まとめて。適当に答えてくれたら、あたしの高性能な両耳がバッチリ聞き分けるから」

アメリが満面の笑顔でサムズアップ。その自信は一体どこから湧いて来ているのだろう。早とちりと勇み足が何より得意な彼女は、たった一つの話題ですら右耳から左耳へスルーパスを決め

たのち、無自覚のうちに明後日の方向へ主題を蹴り飛ばすのが常なのだが。
「しょうがないな、一つ一つ説明するしかないか……。えーと、バイトは特例で許可されたんだ。ほら、現代の常識とましろの知識って、まだ結構ズレがあるだろ？　その溝を埋めようと思ったら、ガッコに閉じこもってる訳にいかないから」
「社会勉強の一環ってこと？」
「そうそう。ちなみに、バイトを奨めたのは僕。ダメモトだったんだけど、例の理事さんが意外と簡単に許可を出してくれて」
「へー、フローレスもあれで結構、融通が利くんだね」
「最近、閉塞的なところを改善しようって動きが出てきてるんだってさ。美冬さんが言ってた」
「まろまろが編入学するまで、明治時代の校則がそのまんまだったとか言ってたもんね。……ユウが退学を賭けて頑張った甲斐、少しはあったんだね」
「僕は関係ないと思うぞ、この場合。……あとはほら、ましろって僕の家から通学してるだろ？　放課後の行動は制限しきれないって面もあるんだと思うな」
「ふむふむ、へー、なるほどねー。納得」
顎に手を当て、もっともらしい顔をして頷く。本当に納得したのか怪しいものだ。
「でもさ、ユウ、だいじょぶなの？　ヨメさん一人で街に出しちゃって」
「……？　どういう意味だよ。ましろは買い物でも何でも普段から一人で出かけてるけど」
「そういうことじゃないって。まろまろって良くも悪くも純粋培養でユウしか知らないじゃん。百戦錬磨のオトナの男に言い寄られたらコロッと騙されちゃうかもよ？　ほら、バイト先で口説かれたとか惚れた腫れたとかありがちな話でしょ」
実に楽しそうに、そして、実に意地悪く。ニヤニヤとアメリが笑う。
そこまで来れば、朝一番でいまひとつ回転の鈍い裕理の頭でも察しが付いた。アメリの本題はこれなのだろう、と。
「あのなあ……。ましろに限ってそんなことある訳ないだろ」
「いっやー、わっかんないよー。まろまろってあんな可愛いんだよー？　自分にその気がなくても、言い寄られて押し切られてハラヒラホレハレって」
「そこらの男が下心丸出しで近寄ってきたら、例のハンマーでしゃれこうべ粉砕する勢いでドツかれて終了だっつーの。それに、ましろのバイト先ってペットショップなんだぞ？」
「へ？　それって、ひょっとして……」
「公園近くのあそこだよ、葦原町に一件しかないだろ。犬と猫の専門で、店長さんは三十代の女の人。ダンナが結構稼いでるから、半分趣味でやってんだって。今まで従業員は取ったことないらしい。ましろが最初」
効果抜群だった。アメリの顔から笑みが消え、不満と失望と落胆でみるみるうちに歪んでいく。
「えええええー。何それー。面白くなーい」
「面白くなくて結構だ。僕もましろもお前に娯楽のタネを提供するために生きてる訳じゃない」
「普通さぁー、バイトっつったらコンビニとかファーストフード店とかじゃんかぁー。何でそーいうドラマが起きそうなトコをぜーんぶ素通りしてペットショップなのぉー？」
「それは本当にたまたま。ましろとバイトの話をしながら街を歩いてたら、ペットショップの前を通りかかってさ。そのまま飛び込み、面接、即内定」
ぱちくり、と音が立つほど、アメリが目を見開いて瞬きを一つ。

「何よ、その運命の出会いっぽいテンポの良さ。ひょっとして、太転依の躾が得意だからとか、そういう理由？　まろまろって、太転依の中でも四足の獣とかって類の頂点らしいしさ」
「いや、太転依と動物は直接関係ないから。化成とか進化の過程で、たまたま姿とか機能が似ちゃっただけで」
「でも、親近感くらいはあるんじゃないの？　あんたのヨメさん、自分の眷属とか相当可愛がってんじゃん。そーいう連中にそっくりの動物に囲まれてたら悪い気しないんじゃない？」
「そんなの、ましろに訊いてみなきゃわかんないってば」
思わず、口走ってしまう。
しまった。
伊達にアメリと付き合いが長い訳ではない。話の流れから、次に彼女がどう切り返してくるか容易に想像できた。だから裕理は、愛する妻に迷惑をかけたくない一心で別の話題を切り出そうとしたのだが。
「うん、じゃあまろまろに訊いてみよう！　ユウ、放課後は待ち合わせて一緒にペットショップね！　まろまろが頑張ってるなら、友達として応援してあげないとさ！」
脊髄反射同然で喋り続けるアメリの方が、裕理よりはるかに早かった。
「い、いや、待てアメリ。あのな、ましろは良くてもバイト先の迷惑に」
「あ、いっけない。そういや言い忘れてた。おはよ、ユウ。今日もいい天気だね！」
「朝の挨拶なんかどうでもいいんだよっ。つーか今日はどう考えても天気悪いってば。いや、そんな話はどうでも良くて、あのな、だから……」
言い澱むうちに、天井のスピーカーからチャイムが流れ始める。一限の講義が始まる五分前を告げる予鈴だ。裕理にとっては最悪、アメリにとっては絶好のタイミング。
「じゃ、そういうことで！　話は終わりね！　放課後を楽しみにしつつ、今日も一日がんばろう！　おーっ!!」
アメリは握り拳を天に向かって突き出しつつ、足取りも軽やかに背を向け歩み去る。裕理の反対意見など聞く気はないのか、それとも、裕理が反対するとは思っていないのか。いや、そもそも何も考えていないだけか。
ただ、裕理がいくら説得してみたところで無駄だったろう。ここまで状況を知ってしまった以上、アメリはいずれ一人ででもましろのバイト先へ行くはずだ。そこで事件が起きてしまえば何もかも手遅れ。親友の要三九郎がバンド活動を理由に学院を休んでいる今、暴走しがちなアメリの手綱を引き絞れるのは自分しかいないのである。
結局のところ、アメリの望み通りにペットショップへ行き、ましろの様子を見に行く以外、裕理には選択肢が残されていないのだった。

2

所用で外出していたペットショップの店長が、日増しに大きく重くなる自分のお腹を抱えつつ、銀行での振り込みや日用品の買い出しを終えて店舗へ戻ってきた。
「……まあ」
玄関の扉を潜った途端、思わず感嘆の声が漏れた。見慣れた店の光景のはずなのに、自分が店を離れていたのは小一時間程度のはずなのに、まるで見違えた。床が、窓が、テーブルが、徹底

的に磨き抜かれてぴかぴかと光り輝いているのである。
「さすがに、檻(ケージ)や籠(サークル)までは掃除していない、か。けれど……」
フード類や牛皮のガム、玩具などなど。〝こうして欲しい〟と思っていたとおりに売れ筋から綺麗に陳列され、日に焼けて変色していた値札の類も惚れ惚れする達筆で書き直されている。
「あっ、店長。お帰りなさいませ」
店の清掃を行ったに違いない、最近雇ったばかりのアルバイト――泉戸ましろが、店長の気配に気付いてバックヤードの間仕切りから姿を現した。
ちなみに、今のましろは和装に洋風のエプロンという少々変わった格好だ。彼女は洋装の私服を持っていないし、ショップはパステルイエローのエプロンを制服の代わりにしているのでこうならざるを得ないのだが、異質な組み合わせにも関わらず存外似合っている。ひょっとしたら、ましろの一風変わった髪型――彼女が人間ではなく太転依(たゆたい)である証の一つ、頭部に一対ある獣状の耳――が、現実感を薄れさせているからなのかもしれない。
「泉戸さん、お疲れ様。これ……掃除、全部あなたがやったのよね？」
「もちろんです。まだ慣れていませんので、予定より三分少々遅れてしまいましたけれども」
「そんなの、遅れた内に入らないわ。本当に、隅から隅まで塵一つ無い……」
店長は心の底から、つくづく思った。心の底からましろを雇って良かったと。
負担を減らすためにアルバイトを雇うべきだと日頃から力説していた夫の弁を聞き入れなかったのは、ようやく実現した子供の頃からの夢、自分の城たるこの小さな店へ赤の他人を踏み込ませたくないという一心からだ。が、妊娠が発覚して早半年、臨月が近付くほどにその信念も揺らぎ始める。お腹の中ですくすくと育つ我が子と同じくらい大切な『子供』たち――展示兼販売用に繁殖者(ブリーダー)から預かった子犬や子猫はもちろん、併営しているペットホテルで顧客から預かった動物たちを含めると、世話をしなければならない動物の数は時として十匹を越える。閉店後にそれらを散歩させる作業ひとつ取っても、身重の自分にとっては決して楽なものではないのだ。
そして、自分の身に何かある時に代役を頼んでいた妹は、仕事の関係で来月まで身動きが取れない。一ヶ月の短期雇用とはいえアルバイト募集の張り紙を出したのは、店長にとって苦渋の決断だったのだ。
「ほんと、良かった……。直感だけど、一目見た時、あなたなら大丈夫って思ったのよ」
「そんな、店長、大袈裟です。雇って頂いている以上、やって当然のことをしたまでです」
「ご謙遜。私だって、ここまで熱心に床を磨いたこと一度もないわよ？　……じゃあ、店先のプレート、営業中に変えてくるわね」
「あ、だ、ダメです店長！　まだ掃除は途中なんです、終わってないんです、最後の仕上げが残ってるんですっ!!」
「えっ……？　どこが？」
これ以上どこに掃除する場所が残っているのかと、首を傾げて立ち尽くす。
その店長を尻目に、ましろが一度バックヤードの方に姿を消した。いや、一分も経たずにすぐ戻ってくるのだが、その両手には小皿に盛り上げられた塩が二つ乗せられている。
「これを、玄関の両脇に起きまして、と……」
玄関戸へ向け、まず一揖、続けて二拝。忍び手で二拍手して、また一拝。邪なものを退け、福を招いていただけるようにと、心の底から願を掛けつつ――。
「……はい、店長。これで店内の清掃、終了です！」

誇らしげに胸を張りつつ、ましろは花が咲いたような満面の笑顔を見せる。
「あの、泉戸さん……。うちはそんなの、今まで一度も……」
「でしたら、これを期に是非、習慣に。願をかける、願いを込めるという行為には、意味があるものですから」
「何、それ。こういうのって、迷信でしょう？」
「いいえ。ヒトの〝想い〟には現実を変える力があります。祈りと共に発散した生気が場に留まることで、似通った波長を持つ神気を引き寄せ、具体的な力を示し始める……。例えば、邪なものを退けて良いお客のみを呼び込むとか。これも立派な神通力、一種の結界なんですよ」
「あ、あの、ごめんなさい。私、そういうのは興味なくて。……泉戸さんって、ご実家が神社だって言ってたわね、そういえば」
「正しくは、夫の実家……あっ、そう言えば、お渡しした履歴書には書いていませんでした。私は、泉戸家に嫁いだ身なんです」
夫の実家だの、嫁いだ身だの、若い娘が使うとは思えない類の言葉を咄嗟に聞き分けられなかった。店長が小首を傾げる。
問い質そうかと思ったが、口を開きかけた転瞬、玄関の扉が開いた。
「すみませーん。そこに準備中ってプレート出てるんですけど、まだやってないんですか？」
来客を告げるドアベルと共に現れたのは、学生服姿の若い女性客。常連ではない。少なくとも店長に見覚えはなかった。
「いえ、大丈夫ですよ。どうぞ中へ、いらっしゃいませ」
些細な疑問は後回し。店長は接客の笑みを浮かべつつ、客を迎えようとした。
ところが。
「なっ……?!　こんな所に何しに来たんですか、アメリさんっ！」
隣にいたましろが、女性客を指差して素っ頓狂な声を上げる。
「あら、このお客様、泉戸さんのお知り合い？」
「はい、夫の幼馴染……いえ、私にとって大切な友人でもあるんですが、その、真剣にお仕事をすべき場所にはあまり来て欲しくない方というか、何と言うか……」
「は……い？」
「と、とにかく、すぐに追い返しますから……。ああもう、帰って、帰って下さいアメリさん、私は仕事中なんですっ、遊び気分で来られては迷惑なんです」
それを聞いた女性客――アメリは、あからさまに口元をひん曲げて眉を顰める。
「……ちょっと、まろまろ」
そのたった二言ですら、アメリの心中に怒りが渦巻いているのがはっきりわかる。が、ましろは、睨み付けてくるアメリを完全に無視。
「ああっ?!　裕理さんまでいらっしゃるじゃないですか！　どういうことですか、裕理さんがついていながら、どうしてアメリさんを店まで連れてきたんですかっ?!」
アメリの後ろで申し訳なさげに立っていた裕理を見とがめ、指差しながら声を張り上げる。
「ご、ごめん、いやでも、その、ましろの様子を見せたらすぐ帰るつもりだから」
裕理は肩をすくめて事情を説明しようとしたが、ましろの弁は収まらない。
「このアルバイトは私にとって大切な社会勉強だから、遊び気分で邪魔をされたら困るんだってあんなにお話したじゃないですか！　仕事に慣れるまでは絶対誰にも話さないでって！」

「い、いや、その、何とか説得しようと思ったんだけど無理っぽくて、いざとなったら身体を張ってでも止めるつもりで……うん、ましろにもお店にも絶対に迷惑はかけないから」
「店の中まで入ってきた時点で迷惑になっちゃいますよ！　外から通りすがりに見るだけで充分じゃないですか！　ほら、早く帰って、帰って下さい！　はぁーやぁーくーっ!!」
興奮気味に、一息でまくし立てる。
このましろの態度に、アメリの我慢がとうとう限界に達してしまう。
「くぉらぁ――――――――っ!!」
怒りの気を吐くと共に勢いよく振り下ろされた手刀が、ずびし、と音を立ててましろの前頭部へ叩き込まれた。裕理の方に気を取られていたましろにとっては完全に不意打ちだ。喋っていたところに頭へ衝撃を受けたせいで軽く舌を噛んでしまう。
「い、いた、いたたたっ……!!　突然何を……!!」
「うっさい黙れ！　まったくもう、心配して来てみたら案の上なんだから!!　あんた、どんだけ常識が欠けてんのよ!!　これ以上店長さんに迷惑かけるんじゃなーいっ!!」
「……な」
「まろまろはバイト中なんでしょ?!　雇われてお給料もらってる以上、このお店にいるまろまろは〝泉戸ましろ〟じゃないのよ?!　何よりもまず、ペットショップの店員さん！」
「そ、そんなこと、言われなくてもわかって……」
「わかってない、なーんにもわかってないっ！　わかってたら、お客さんであるあたしやユウにそんな口を利く訳がないでしょうがっ!!　それとも、自分の亭主や友達はこの店のお客さんじゃないとでも言うつもり?!　まろまろはバイトのくせに客を選り好みできるほど偉いワケ?!」
予想外の正論である。ましろがはっとなって息を呑んだ。
その顔を見たアメリは怒りを収め、溜息を一つ。
「ほら、そこのお姉さん……店長さんなのかな。さっき、まろまろの横であたしらにちゃんと〝いらっしゃいませ〟って言ってたでしょ。これが正解なんだよ。もし万が一、本当にあたしとユウが冷やかしや嫌がらせでこのお店に来たんだとしても、あくまでも店員として振る舞って、お客さんとして応対するのが基本なの。最低限、その可愛らしいエプロンを巻いてる間は、ね。……そうですよね？」
状況が掴めずに呆然としていた店長だったが、急にアメリから話を振られて我を取り戻す。
「え……ええ、そう、そうです。お客様の言う通り」
「ほら、ね。まろまろ、気をつけなよ？」
ましろはもう、ぐうの音も出ない。
浅慮で軽率だった自分を恥じるより他になかった。
「ご、ごめんなさい、アメリさん。すみません、店長。裕理さんも……」
申し訳なさげに肩を落としたましろが、何度も何度も店長とアメリ、そして裕理に頭を下げる。
「いや、そんなにペコペコしなくていいってば。まろまろはこれがバイト初体験なんだし、失敗して当然だもん。次から気をつければ……って、これはあたしが言うことじゃないか」
アメリの視線を受け、店長がその言葉尻を継ぐ。
「お友達の言う通りよ、泉戸さん。次から気をつけてくれたら、それでいいから」
「は……はい、本当に、本当にすみませんでした……」
ある意味、アメリがましろを言い負かしてしまった格好である。

そのことに最も驚いているのは、おそらく、アメリの背後に立ち尽くしている裕理だろう。驚きを通り越して絶句してしまい、ここまで何一つ口が挟まなかったのだから。

「アメリ、お前……。どこでそんな接客業のイロハを覚えたんだ？」

ようやく気を取り戻し、最大の疑問を投げかける。

「どこでも何も。あっちこっちで、としか言い様ないよ。あたし、アルバイターとしちゃベテランの部類だしさ。長期休暇の度にあちこちバイト行ってるの、ユウも知ってるでしょ？」

「それ、遊ぶ金欲しさだろ？　バッグとか香水（フレグランス）欲しさと言い換えてもいいけど」

「ええい、動機は別に何だっていいでしょがっ」

「いや、そんな動機を知ってるから、アメリはいっつも手を抜いて適当にバイトやってるんだろうと思ってて……」

「それは考え方おかしいよ、ユウ。仕事ってね、ある程度マジメにやってないとほんっとに面白くないんだよ。そりゃ、あたしも聖人君主じゃないからある程度はサボるけどさ。どうせなら辞める時に〝君がいなくなって残念だ〟とかお世辞でも言ってもらいたいじゃん？」

「……ホントお前、意外なところで常識人だよな」

「意外なところで、ってのは、聞かなかったことにしとくよ」

裕理は苦笑しつつも、アメリの意外な一面に感心しているようだ。

「まろまろが頑張ってるなら、友達として応援してあげないと……か。あの時、脊髄反射で返した言葉こそが、アメリの本音を反映してたって訳か。納得」

「ん？　何さ、ぼそぼそとちっちゃい声で。よく聞こえない」

「いや、何でもない。いつもの独り言」

その、裕理とアメリのやりとりを聞いているうち、店長の顔に我知らず笑みが浮かんでいた。

「二人とも、本当に泉戸さんを心配していたのね。理由はそれぞれ違ったようだけれど」

裕理とアメリが照れ臭そうに頭を掻き、あるいは苦笑を見せる。

（根は真面目で優しい子たちなんでしょうね。今時珍しいわ）

友人は、その人の内面を映す鏡だとよく言われる。その意味で店長は、この二人もましろと同様にしっかりした若者なのだろうと信じることができた。

「ねえ、泉戸さん。あなたが嫌でなければ、今日はお友達と一緒に働いてみる？」

いきなり言われたましろは当然面食らったが、言った本人である店長も自分の言葉に驚いていた。これまでアルバイトを雇うことそのものを忌避してきたというのに。

けれども、それで当然かと思いもする。ましろを始めとしたこの三人が、店長である自分を軽んじて大切な店をないがしろにする光景は、どうやっても想像できなかったから。

「この子たちの寝床……子犬や子猫の籠（ケージ）だけれど、なかなかまとめて掃除できなくて。これまではローテーションを組んでやっていたのだけれど、最低限臭わないように気をつけるだけでも結構大変なのよ。でも、私と泉戸さん、お友達を合わせた四人なら、あっという間に終わると思うのね。もちろん、お友達のバイト代はちゃんと出すわ」

「い、いいんですか、店長……」

「ええ。お友達とお喋りしながら働く方が、泉戸さんも楽しいんじゃない？　さっきみたいに、学ぶことも沢山あるかもしれないし」

「ですが、これはお仕事ですし……。もし、見知った同士で遊び気分になっては……」

「泉戸さんのお友達は、その辺りの区別もちゃんと出来そうだもの。それとも、私の直感って外

れているのかしら？」
「い、いえ、裕理さんはこう見えて、いざという時は本当に頼りになる方です。アメリさんも根は本当にいい人で」
「わかるわ、ええ、そうでしょうね、私もそう思うわ」
「ですから、二人とも、信用して下さって構わないと思います。思うんですけど……」
「なら、心配することなんか何もないじゃない。ね？」
「……て、店長が、そこまで、仰るなら……」
口では不承不承のように言いつつも、ましろの顔色を見る限り、まんざらでもなさそうだ。
そして店長は、裕理とアメリの方へ向き直る。
「どう、二人とも。二時間くらい、お小遣い稼ぎと思って協力してくれない？」
快諾してくれるだろうと思って言ったのだが、意外にもアメリが渋い顔をした。
「あたし、犬とか猫とか大好きだし、お財布も寂しいから、ほんとは喜んで乗りたいんですけど……。それ、今日じゃなきゃダメですか？　週末とかなら空いてるんですけど」
「あら、何か予定でも？」
「えと、うちのダディとマミィ……父と母の結婚記念日で。ホームパーティっていうか、みんなで食事しようかって。だから、早めに帰らなきゃいけないんです」
そのアメリの言葉に、すぐ後ろに居た裕理が眉を顰（ひそ）める。
「何だよそれ。そんな話、僕は聞いてないぞ」
「ん？　あたし、朝、説明したよ？」
「してないしてない。知ってたら絶対にお前をここまで連れてきてない。僕だって今日は早めに帰らなきゃいけないんだ。神通力の修練と、街の見回りと……」
「そんなの、毎日やってることじゃん」
「まだ話の途中だよっ。……週刊誌の取材、テレビ番組の制作会社と顔合わせ。それから、美冬さんから紹介されたお役所の偉い人からも電話があるはずだ」
「ちょ、ちょっと、何よそれ」
「全部、太転依絡みの話だよ。そろそろ情報封鎖も限界だから、段階を追って公開しようって話になっててさ。ほとんどがそのための打ち合わせ」
「そ、そうなんだ、知らなかった……。もう、言ってくれたら無理に誘わなかったのに」
「ウソだ。それは絶対にウソだ。断言してもいい。面白そうなことを見つけたお前が、自分の意見を曲げるようなことは絶対ない。あるはずがない」
「ちょっとぉー、昔のあたしと一緒にしないでよー。これでも最近はね……」
「はいはい、わかったわかった」
それらの話は、店長には理解しがたい部分も多々あったのだが。
「とにかく、二人とも忙しいのね。残念だけれど、また今度時間があるときにでも立ち寄ってちょうだい。泉戸さんのお友達なら、うちの店はいつでも歓迎だから」
「はい、覚えておきます」
「有り難うございます」
裕理とアメリがそれぞれ返事をし、店長が微笑み返す。
それで、話が区切れた。暫時の沈黙。これが場に区切りがついた証になった。
「……じゃ、ましろ。僕らは帰るから、頑張って。店長さんもお騒がせしました」

「またね、まろまろ」
二人が扉を開け、店を後にしようとする。
「……本当に、有り難うございます。裕理さん、アメリさん」
去り際に、ましろが声をかける。
「特に、アメリさんがいらっしゃらなかったら、私、大切なことを勘違いしたまま働き続けていたかもしれません。さっきは酷いことを言ってしまって、本当にすみませんでした」
「ああもう、やめて、やめてよ。感謝も謝罪もいらないから」
アメリが照れつつ、頭を掻く。
「まろまろは、あたしにとって大切なトモダチなんだから。このくらい当たり前じゃん」
「……はい」
「また、夜にでも電話するよ。その時にでも、また話そ？　バイトのことであたしが教えられそうなことがあったら何でも聞いてくれていいから」
「はい。……はい、はいっ」
「そんじゃね、まろまろ。頑張ってね！」
扉が閉まって、アメリの笑顔がましろの視界から消えた。
「いいお友達ね。泉戸さんが羨ましいわ」
呟いた店長の視線は、去っていく裕理とアメリの姿を窓越しに見つめ続けている。
だから、傍らのましろが、複雑な表情を見せていることには気がつかなかった。

公園側の駐車場に駐めてある愛車（バイク）を取りにいく裕理と、バスで自宅に帰るアメリ。二人の帰る方向はいずれ分かれることになるが、ペットショップを離れてしばらくは一緒だった。
「いやー、よかったよかった。自分の目で確かめるまで安心できなかったのよねー。店長さん、いい人そうだったし、あれならまろまろがちょっとくらい常識外れのことしても優しくしてくれそう。うん、絶対大丈夫だよ」
そう言うアメリは、一点の曇りもない笑顔を浮かべていた。
アルバイトの経験が多いアメリは、それぞれの働き先で決して愉快とは言えない経験もしてきている。彼女自身は何とか解決してきたが、何だかんだ言っても人間社会に出て間もないましろはどうだろうか。最悪、春先に女子学部（フローレス）で起きたあの事件のように、誤解と軋轢が彼女を追い詰めることにならないだろうか。そんな風に考え始めると、心配で仕方がなかったのだ。
「ユウが相手だと、つい馴れ合いみたいになって冗談半分で言っちゃうけどさ。居ても立ってもいられなかったのよねー、あたし」
「自分が経験したことだから……その辛さや痛みがわかるから、か」
「そこまで言うと大袈裟だよ？　深く考えてた訳じゃないしさ」
「どーだか。朝方に言ったアレだって、きっと、お前の実体験なんだろ？」
「？　アレって、ドレよ」
「バイト先で口説かれたとか、惚れた腫れたとか」
「そりゃま、あたしも年頃の女の子ですから。そーいうのが全然無かったとは言いませんヨ」
「百戦錬磨のオトナの男に言い寄られて、コロッと騙されたとかも？」
「いやいやいや、それはない、ない。そんな雰囲気が漂ってきた瞬間に無視してきたし」
――何のために？

思わず言いかけて、裕理は喉元でその言葉をなんとか呑み込んだ。アメリが恋愛事を遠ざけてきた理由など、たった一つしか思いつかない。流行の可愛い服や香水（フレグランス）を欲しがってバイトに勤しんでいたこと自体も、単なる物欲が理由ではないはずだ。

今の裕理なら、そのことがよくわかる。アメリの心中は充分察してやれる。

だが彼は、その上で素知らぬ顔をする。痛みを伴いながら乗り越えてきたからこそ、お互いに心の整理ができているからこそ、裕理とアメリは仲の良い幼馴染で居続けられるのだから。

「あたしさ、まろまろのこと、好きなの。ホントに大事な友達だと思ってる」

「？　何だよ、いきなり真面目な顔して」

「多分、まろまろも、あたしのこと友達だと思ってくれてるの。最近は一緒にいると楽しいし、話も合うんだ。性格は真逆だけど、なんか根っこが同じというか、ノリが似てるというか」

「はは、そうだな。思い込み激しくて時々突っ走るとこなんか、そっくりだ」

「こらっ、そういう混ぜっ返し方をしなさんなっ」

「これからも、ましろといい友達でいてやってくれ。今度からはバイト先にも一人で行けばいい。ましろのことを思ってしてくれることに、僕は文句なんか言わないから。……どうせ今日も、自分が予想外のポカをやってましろに迷惑かけないよう、僕を無理矢理巻き込んだんだろ？」

「あ、あれ？　気付いてたの？」

「確信したのはついさっきだけどな。ましろがどんなバイトをやってるか、学院側には届け出をしてるんだ。当然蘭ちゃんも知ってるから、アメリにも話したはず。……最初から全部知ってないと、あそこまで気を回せないだろ。お前、アドリブ利くタイプじゃないし」

「ありゃ、そこまでお見通しなんだ……。お節介だと思われたくなかったんだけどなぁ」

「まあ、ね。ましろのことが一番好きで、この世で一番心配してるのは僕だって、そこのところは誰にも譲る気ないけど」

「うわ、いきなりノロケますか」

「嫌そうに言うな。でも、僕は完璧な人間じゃない。僕一人でましろの全部をフォローなんかできない。多分、僕の次にましろを気にしてんのはアメリだよ、間違いなく」

「……そっかな」

「ましろにとっても、アメリは一番最初にできた同性の友達だ。存在の重みが違うっていうか、大事に思ってるはずなんだ。現に僕は、今日のアメリみたいな視点は持ってなかったからな。女の子の考え方や感じ方は理解しきれるもんじゃないしさ」

「うん、あんたってほんっとに、にぶちんの朴念仁で唐変木だからね」

「ええい、うるさい。最近はこれでもいろいろ努力してるんだっ」

「愛するヨメさんのために、ね。はいはい、ごちそうさま、ごちそうさま」

そんな話をしているうちに、二人は駐車場方面とバス停方面へ向かう分岐路に立っていた。

「じゃね、ユウ。また明日」

「ああ、また明日」

背を向け合って、歩き出す。

「えーと……あのさ、ユウ」

分岐路からいくらも離れないうちに、アメリが裕理の背中に声をかけてくる。

「どうした？」

裕理は立ち止まって、首だけ後ろに向ける。

「んと、ごめん。やっぱ何でもない。じゃーね、また」
誤魔化して、裕理の背中を見送って。
「……あんたがまろまろに向けてる優しさの半分でも、あたしに向けて欲しかったよ」
苦笑しながら。ちょっとした嫉妬を込めて、呟いた。

同じ頃、ペットショップの一隅で。
「……負けました。完膚無きまでに、アメリさんに負けてしまいました……」
誰もいない店内で、肩を落として項垂れたましろがぽつりと呟く。
店長は、展示のために預かっている子犬や子猫たちの世話をするため、店舗の裏手にある飼育室に入っている。まだ仕事を始めて間もないましろは、扱いの難しい動物たちに触れることを許されていない。清掃と店番が主な仕事なのである。
「いつもいつも、店長は忙しく立ち働いているのに、私は見学ばかり……。働き始めて間もないから仕方がないと思っていましたが、きっと違います。アメリさんのお陰で、私の配慮が足りないのだと、考え方がおかしいのだと、この店の店員としてまだ私は半人前で、店長に認められていないのだと、はっきりわかってしまいました……」
大きな勘違いである。店長はましろのことを気に入っているからこそ、無理をさせず、一つ一つ丁寧に仕事を教えていきたかったのだ。できることなら一ヶ月限定と言わず、ましろが望む限りずっと働き続けて欲しいと願って。
「裕理さんやアメリさんまで雇わなければ、この店の維持管理すらままならないと、私一人では荷が重いと……それが店長の評価なんです。礼儀作法に自信があっても、神通力が使えても、掃除洗濯に絶対の自信があっても、この店にとっては屁の突っ張りにもならない……」
ひたすら誤解が広がっていく。話し相手になってくれる誰かがいれば訂正してくれただろうが、残念ながら今、店の中にはましろ一人だけだ。
そうして、たっぷり三十分。
明るく清潔な店内の中で唯一、観葉植物のせいで仄暗くなっている場所にしゃがみ込んで、挫折と絶望の気分を味わった後に。
「……このまま、終わる訳にはいきません」
その瞳の奥に不屈の炎を灯して、ましろがゆらりと立ち上がる。
「史上最強の太転依、誉れ高き綺久羅美守毘売の化成体たる誇りにかけて……雇用契約が失効する一ヶ月後まで、粉骨砕身、全身全霊をもってこのお仕事に取り組まなければ。頭のてっぺんから爪先までべったべたに塗れた役立たずの汚名、かならずや濯いでみせます」
完璧主義者で負けず嫌いのましろにとって、それは宣戦布告に等しい。
そう、これは戦いだ。完膚無きまでに自分を負かしたライバルとの戦いなのだ。
「……アメリ、さん……」
あけすけで直情的な性格ながら、心根優しく魅力的な女(ひと)。心許せる同性の友人。
彼女と一緒に仕事ができるかもしれないと思ったその瞬間、嬉しいと感じた自分は確かに居た。自分よりも世慣れしている彼女から教えを請いたい、頼りたい、と思ってしまった。
それが、どうにもこうにも、悔しい。
その源が嫉妬だとは気付いている。なんと自分は心が狭いのかと呆れもする。けれど、理屈ではないのだ。絶対に譲れない。そう、かつて一人の男性を取り合った間柄だからこそ。

「あの時、裕理さんがアメリさんに注いでいた、驚きと信頼の眼差し……。それと同じとはいかなくても、せめて半分だけでも、私に向けさせてみせます。やっぱりましろは凄いね、さすが僕の自慢の妻だと、絶対に言わせてみせます……!!」

それはましろの、女としてのプライドなのだった。

3

そして、ましろが汚名を濯ぐ機会は、思いの外早く訪れた。

あれから三日後、女子学部（フローレス）の食堂でましろが昼食を摂っていた最中。携帯電話に店長から電話がかかってきたのである。

「えっ……？　入院、ですか？」

『ええ、そうなの。最近、どうも貧血気味でね。念のためにと思って病院へ来てみたら、お医者様が数日入院するようにって』

「だ、大丈夫なんですか？　店長」

『大丈夫でなければ、自分から電話なんてできないわよ。きちんと検査するために、大事をとって入院して、様子を見よう、ということだから。心配しないで』

確かに、電話越しに聞こえてくる店長の声は、いつもと何ら変わりがない。

「そう、ですか……そうですよね、驚きました……」

『でね、泉戸さんに頼みたいことがあって』

「あ、はい、何なりと！」

『お店がね、がら空きになってしまうの。何日入院するかわからないから、もし長くなるようなら、チビちゃんたちを繁殖者（ブリーダー）のところに返さなきゃいけないんだけど』

「チビちゃん……はい、店で預かっている子犬や子猫ですね」

『でも、もしすぐに退院できたら、繁殖者（ブリーダー）に迷惑をかけただけで終わってしまうでしょう？　連絡先も一カ所や二カ所じゃ済まないし、輸送の用意も大変だから……』

「ふむふむ、なるほどなるほど。つまり、店長がどのくらい入院することになるか判明するまで、お店のチビちゃんたちをお世話すればいいんですね？」

『そうそう、そういうこと。泉戸さん、頭の回転が早くて助かるわ。……できる？』

「できます、できなきゃ嘘です、やってみせますっ。手順と方法は先日教わったことを完っ璧に頭の中へ叩き込んであります。店長が毎日していらっしゃる作業の光景も、明瞭に脳裏へ思い浮かべられます。私、記憶力には自信がありますから！」

『ごめんなさいね、無理を言ってしまって。お店は開けなくていいから、餌やりと、フンの始末と、毛繕い。それに、最低限の籠（ケージ）の清掃をお願い。チビちゃんたちの病気や体調不良のチェックもあるから、できれば、いつも働いて貰っている放課後に加えて、登校前の早朝にも店に行って欲しいところなのだけれど、そこまでは無理を言えないから……』

「早起きは得意中の得意、良妻の必須条件としてとうの昔に習得しています！　もし何か異変があれば、すぐに店長へご連絡して指示を仰ぐようにしますから！」

『そう……それだけわかっているなら、私の方から言うことは何もなさそうね。本当に頼もしいわ……。じゃあ、お願いね』

――その電話が終わって、すぐ。

ましろは、一週間の休学届を出した上で、午後の講義を早退した。
「何かあってからでは遅すぎます！　店長の代理として、一日中しっかり詰めて働かないと!!
私の双肩に、ペットショップの未来がかかっているんですっ!!」
学活担任（チューター）にそう告げたましろの顔は、それはそれは鬼気迫るものであったという。

事前に渡されていた合い鍵を使って、ましろは、通用口からペットショップの中に入った。
電灯のついていない薄暗い店内は、あまり好ましいとは言えない獣の臭いがうっすらと漂っていた。朝から誰も来ておらず、誰も換気をしていない証拠である。
「ええと、換気扇、換気扇。窓も開けて……」
パタパタと足音を立てて店を走り回るましろの気配に気付いて、店内の犬や猫が一斉にワンワン、ニャーニャーと鳴き声を上げ始める。
「わかってます、わかってますよー。お水も欲しいし、お腹も空いてるんですよね。待って下さいねー、すぐに用意しますからー」
まずは、身体の弱い子犬や子猫から。給湯室に行って浄水器の水をやかんに入れ、火にかける。お湯が沸くまでの間に、膝ほどの高さの金網で作った一メートル四方のサークルを清掃し、除菌、消毒。それが終わる頃にはお湯が沸いているので、粒状になったドライタイプのペットフードを皿にあける。子犬も子猫も硬い餌を噛み砕けないので、お湯を注いで粒をふやかしていく。
「いやはや、全部一人でやるとなると一苦労です。これが太転依なら、十年くらい放っておいても何ら問題ないのですけれども……よい、しょっと。結構、大変です……」
やるべきことが多すぎて、ついつい愚痴が出た。ただ、それはあくまで口だけのこと。店長から教わった通り、ひたすら手を動かし、足を使って、額に汗して働き続ける。
「……あ。神通力を使えば、こんなの一瞬で終わらせられるような？」
はたと気がついた。けれども、本当にそうすべきかどうかは、暫し悩んだ。
人々をむやみに驚かせては、今後の共存において大きな障害となりかねない――夫の裕理と出会ったばかりの頃に言い含められたことだが、ましろは今でもこの助言を守り続けていた。
「でも、店のカーテンは閉めたままだし、誰も見ていないのですから……。みんな、早くご飯を食べたいですよね。どうせ店は開けてないし、誰も見ていませんから……」
浄水器を通した水を、念力で宙に浮かせて急速加熱。ペットフードの入った皿に注ぎ込んだのち、その周囲にのみ結界を張って内側の時間経過を加速させると、あっという間に硬い粒が柔らかくなった。
普通ならどんなに早くても十五分から二十分はかかる作業が、わずか一分で終了する。
「さ、ご飯できましたよー。たーんとお食べ」
それぞれの子犬や子猫ごとに小皿へ取り分けて、鼻先へ並べる。
いつもなら、我先にと飛びついてきて食べ始めるのだが――。
「あ……あら？　おチビちゃんたち？　どうかしたの？」
どうしたことか、全く食べようとしない。ダックス、シェルティ、アンゴラ、アメリカンショートヘア。皆、仮の住処であるサークルの隅にうずくまって動かないのである。
「ひょっとして、食事が遅れたせいで体調を崩したとか……？　でも、みんな同時になんて」
さらに。さっきまで「餌をくれ」だの「構ってくれ」だの「散歩したい」だのと言わんばかりにうるさいほど鳴き続けていたペットホテルの犬や猫たちまでもが静かになっていて、それぞれ

の檻（ケージ）の中で身を伏せてじっとしている。

「な、何？　みんな、どうして……？　あ、あれ……」

訳がわからず混乱する。店長が同じ作業をしていた場面を思い出し、自分が何かミスを犯していないか確認しなおしても、問題があるとは全く思えない。

「神通力を使ってご飯を作ったのが悪かった……？　いえ、それなら、檻（ケージ）にいるペットホテルの子まで元気がなくなった理由がわからないし……」

それでも、普段の自分や店長の仕事ぶりと違っているのはその一点しかない。ましろは時間をかけてお湯を沸かし直し、ペットフードをふやかし、普段通りにした餌を作る。

ところが、子犬も子猫もやはり食べようとしない。

「な、なな……？　どうして？　どうして？　何が起きてるんですか?!」

困り果てたましろは、ひとまず子犬や子猫の世話を後回しにして、ペットホテルで預かっている大人になった犬や猫の方に餌を与えてみた。

こちらは原則、飼い主が普段与えている食べ慣れたペットフードを与えればいい。まだ幼い動物と違って人に慣れているから、缶詰を開けて皿に出す、ただそれだけで餌を口にしてくれる。

――そのはず、なのに。

「食……べて、くれ、ない……」

困り果てて、店長に指示を仰ごうと携帯電話を取り出した。が、何度呼び出しても応答してもらえない。おそらく病院で検査を受けている最中なのだろう。

「もし、このまま……時間、経って……チビちゃん、衰弱して、死……そうなったら……」

以前、聞いた。血統書つきの子犬や子猫を一匹購入するための値段は、泉戸家の一ヶ月ぶんの生活費に値する。そんな損失を出してしまえば、自分は間違いなく解雇されてしまうだろう。

ましろの混乱が頂点に達する。

思い出すのは、春先の苦い経験。今の自分へと化成して間もない頃だ。人間と太転依の共存を実現するという大きな使命に燃えていた彼女が味わった、最初で最大の挫折。誠心誠意頑張っているのに、嘘などついていないのに、誰も信じてくれない、自分の味方をしてくれない。心の病なのだと決めつけられ、女子学部（フローレス）という善良な人々の集団（コミュニティ）から排除されそうになって――。

「な……んで、また、こんな……」

ましろの目に涙がにじみ始める。春先の事件は、彼女にとってそれだけ大きな心の傷だった。

そして。

行き詰まったましろを助けてくれるのは、いつも決まって――。

「あれ、鍵が開いてる？　ましろ？　居る？　おーい」

勝手口の外から、聞き慣れた男（ひと）の声がする。

「……っ、裕理、さ……」

「あ、ましろ？　居るの？　入っちゃっていい？　ましろがいきなり早退したとか、休学届けまで出したとか、美冬さんから聞いてさ。びっくりして飛んできたんだけど……」

最愛の男（ひと）にすがろうと、一歩踏み出したましろの足が、一瞬、止まる。

そもそもアルバイトをするよう勧めたのは裕理だった。ましろの言動と人間社会の間にはまだズレがあるから、それを埋めるための貴重な経験になるはずだと彼は言った。それを受け入れたからこそましろはここに居るのだが、彼女は裕理が言うほど、自分と人間社会の間に齟齬を感じていなかった。

（裕理さんったら、まだそんなことを気にして……。私はもう大丈夫ですよ、この何ヶ月かでずいぶん勉強もしたし、学院関係者を始めとして多くの人に受け入れてもらっている。よーし、ここは完っ璧にアルバイトとやらをこなして見せて、自分に対する夫の評価を刷新させないと！）

ましろの内心は、そんなところだ。

けれど、ここでまた裕理に頼ってしまえば、自分は彼がいなければ何も出来ないのだと認めてしまうことになる。先日もアメリに配慮が足りないと諭されたばかりだ。そうなれば、愛する夫は当分の間、自分に対する評価を変えてくれないだろう。

事情は、後で説明します。私は今、仕事中です。帰って下さい。そう言うべきかもしれない。いや、そう言うべきだ。ここは何としても、独力で解決しないと。

――にゃあ。

内向し、硬直し始めたましろの心に、心細げな鳴き声が届く。

振り返ると、サークルの片隅で弱々しく寝そべる子猫の姿が目に入った。一日に四度から六度の食事を必要とする幼猫にとって、半日以上何も口にしていない苦痛はどれほどのものだろう。

くだらない自分のプライドと、幼い命。優先されるべきは、果たしてどちらか。

考えるまでも、なかった。

「……あ、ましろ。どうしたの？　え、あれ、目が赤い？　まさか、泣いてたの？」

自分で勝手口を開けて、裕理を店内に迎え入れる。

「助けて下さい、裕理さん……。どうしていいか、わからなくて……」

入院した店長から留守を頼まれたこと、店に入って餌を与えようとしたこと、どの犬も猫も自分が与えた餌を食べようとしてくれないこと。全てを、かいつまんで説明する。

「私、何か間違ったことをしているのでしょうか……」

「う～ん……。犬とか猫とか鳥とかカブトムシとか、そりゃ子供の頃は色々飼ってたけど」

「さ、さすが裕理さん！　なら、こんな時の対処法も……!!」

「いやいや、飼うのに飽きて世話を親に押しつけたこともあるし、何もできずに死なせたこともある。こういう方面はド素人だよ、僕は。正直言ってお手上げ。店長さんがましろの連絡に気付いて、折り返し電話してきてくれるのを待つしかないだろうね」

「……そんな……」

「でも、どうしてだろう……。こんなたくさんいる動物が一斉に餌を食べなくなるとか、そんなの、どう考えたって有り得ないと思うんだけど……」

裕理は呟きつつ、子犬用にふやかした餌の入った小皿を取り上げる。

「おーい、お腹空いてないのか？　ほらほら、餌だぞ、ほーら」

鼻先に持っていって、ゆらゆらと小皿を揺らしてみた。

すると、裕理の手の中にある小皿へ、子犬が鼻を伸ばしてきた。においを嗅いでいる。

「？　私の時と、様子が違う……」

転瞬、ましろがあれほど悩んだのが嘘のように、餌へむしゃぶりついてきた。

「……ましろ。普通に食べてるよ」

「そ、そんなはずありません、さっきまでは、確かに！」

「でも……」

裕理は、ましろが用意したペットフードの小皿をいくつか手に持ち、並べていく。子犬たちは尻尾を振りながら我先にと賭け寄ってきて、むしゃむしゃと餌を食べ始めた。

「こ、これはつまり……太転依の私が持ってきたご飯など食えるものか、たとえ飢え死にしたとしても化け物なんぞの施しは願い下げだね、ということなのでしょうか……」
ある意味、ましろの自虐的な冗談だったのだが。
「うーん、言い得て妙かも」
「そそっ、そんなあっさり肯定しないで下さいよ裕理さん！　私の立つ瀬が！」
「いや、ほんとにましろが動物に嫌われてるって言ってるんじゃないよ」
言いつつ、裕理は成犬用の餌を持って、ペットホテルの檻（ケージ）へ近付く。
「このラブラドールなら、大人しいかな。人慣れしてそうだし。ましろ、この柵開けていい？」
「あ、はい……どうぞ」
ましろが鍵を外して、檻を開く。中にいる成犬は人の腰の高さほどもある大型犬だが、檻の奥で身体を丸めるようにして座り込み、顔だけをこちらに向けていた。
「ほら、おいで。餌だぞ。ほら、何も怖くないから」
裕理が呼びかけると、大型犬がのそりと身体を起こす。そして、ゆっくりと檻の外に出てきた。
「お座り、待て。……よし、食べていいよ」
よく躾されているのか、今日初めて会ったばかりの裕理の言うことを聞き、餌を食べ始める。
その大型犬の背を、裕理は優しく撫でてやる。
「……やっぱりそうだ。かすかに震えてる」
「え……？」
「犬や猫って、聴覚や嗅覚だけじゃなくて、第六感って言うのかな、そういうのも鋭敏だって言うじゃない。飼い主の危険を数百キロメートル離れた場所で感じ取るとか聞いたことあるし。それって多分、一種の超能力とか神通力だと思うんだけど」
「はあ……」
「だったら、ましろがどれだけ強力な太転依なのか、直感的に感じ取ってもおかしくないよね。人間と何も変わらない普段の時はともかく、神通力を使うために神気を開放したら……」
「……あ」
「ましろって本当は、ライオンやトラ、狼なんかよりずっとおっかないからなー。そんな相手の手元に餌があるからって、ひょいひょい食べに行けないよ」
「あの……裕理さん。私を猛獣扱いしないでください。今、ちょっと傷つきました……」
「ははは、実際、猛獣でしょ？　特に修練の時とか……あ、最近は夜のベッドの上でも」
「うわわわわわっ?!　な、ななな何を言ってるんですかーっ!!」
「そんな照れなくても……。動物たち以外は誰も聞いてないってば」
「ほんとに、もう……。毎晩取って食われちゃってるのは私の方なのに……」
「ま、ヨタ話はとにかくさ。今までは、どの犬も猫も普通にしてたんでしょ？」
「あ、はい。それは、もちろん」
「じゃあ、みんな、ましろのことを普通の人間だと思い込んでたんだよ。そこでいきなり神通力使っちゃったんだから、そりゃ驚いちゃうし。怯えさせてごめんって、まず謝らないと」
「謝るも何も、言葉、通じませんよ？」
「そんなことないよ。言葉に惑わされないぶん、犬や猫の方が気持ちは通じるものだから」
「そう……なん、ですか？」
「そうだよ。じゃあ、ましろが中小の太転依に躾する時、どうしてたの？　あいつらも言葉なん

か通じないでしょ？　動物とほとんど変わらないんだし」
「いえ、相手が神通力を使えるなら、こちらも……心で直接会話するというか」
「じゃあ、犬や猫にもそうしてやればいいじゃない。伝わるよ、きっと」
「うーん、まあ、やってはみますが……」
言いつつましろは、裕理の側にいる大型犬に近寄ろうとする。
と、大型犬は餌を食べるのを止め、慌てて裕理の背後へ隠れるように回り込む。
「か、かんっぜんに嫌われてます……。ここまで怯えられては、もう無理なのでは……」
「ましろ、諦めない、諦めない。きょーぞん、きょーぞん」
「は？」
「忍耐と慈愛を持って接せよ、でしょ？　人間と太転依の関係も、男と女も……犬とましろも、本質はみんな一緒だよ。できるってば、ましろなら大丈夫」
「……」
本当に、この夫（ひと）はどうしていつも、私の心に直接届く言葉をさらりと口にするのだろう――。
そんな人だから好きになったし、嫉妬もするし、認めて欲しいと思いもするのだけれど。
「本当に、裕理さんには、敵いません……」
夫の笑顔を支えに覚悟を決めて、深呼吸をひとつ。
脚を折って、床に膝をつく。視線をなるべく低くする。
「……ワンちゃん、おいで」
呼びかけるが、裕理の背に隠れた大型犬は、怯えた視線を向けてくるばかりだ。
でも、決して諦めない。まずは、その事実を受けとめる。

「そんなに、怯えさせていたんですよね……。本当にごめんなさい」
「私、そんなつもりはなかったんです。みんなに少しでも早くご飯をあげなきゃって」
「お願い。そんなに嫌わないで。私は、あなたの味方だから。本当だから」
「どうか、こっちに来て。あなたの頭を撫でさせて。ごめんなさいって伝えさせて」
「……お願い」

最初の一匹がましろの側に来て、手ずから渡した餌を口にしてくれるまで、二時間かかった。
けれど、その様子をずっと見ていたお陰か、次の一匹はすぐに懐いてくれた。
結局、日が暮れる頃には、ましろは以前と同じ――いや、それ以上の信頼を、店にいる全ての動物たちと築き上げることができたのだった。

3

一ヶ月後。
梅雨も明け、夏場の強い陽光が降り注ぐ公園で。
「……で、今はこんな有様になっちゃった、ってワケだ」
ベンチに座ったアメリが呆れ気味に呟く。彼女の目の前、青々と茂った芝生の中には、毛皮の山が――その中央にいるましろに群がる犬や猫の群れがあった。
「ふふふ、ふふっ……あ、こら、私の尻尾を引っ張っちゃダメ。ああもう、こら、怒りますよ、

もう。はいはい、わかってます、撫でて欲しいんですよね……」
女子学部（フローレス）の制服姿で動物たちと戯れ続けるましろは、満面の笑顔だ。周囲で揺れている尻尾の数は、いったい何本になるのか。どれがましろのものなのか、とても判別できない。
「バイト先のペットショップって、地域じゃ結構有名らしくてさ」
アメリの傍らにいる裕理が、こうなるに至った経緯を説明する。
「一ヶ月くらいバイトしてる間に、餌の買い置き、トリミング、ペットホテル……葦原町の飼い主とペットがほとんど全部お世話になって、ましろと何度か顔を合わせて」
「その全部と〝きょーぞん〟しちゃった……のね。この公園に散歩へ来た動物がみんな揃って、まろまろのところへ集まってきちゃうくらいの勢いで」
「そういうこと」
「そこまで動物の扱いに慣れちゃったら、ペットショップの店長さん、まろまろのこと手放したくなかったんじゃない？　時給上げるからずっと居て、とか言われなかった？」
「言われたらしいよ。でも、断ったってさ。数日のヘルプならいつでも手伝いに来るけれど、ここで働き続ける訳にはいかないんです、って」
「ひょっとして、太転依の関係で？　いざって時に対応できないから？」
「そう。……もともと、店長さんの妹さんが代理で店に入るまでの臨時だったんだから、雇用契約通り。何も問題ナシ」
「まろまろらしいなぁ……。今はそんなに目くじら立てなくていいのに。あたしとかみっふぃーとか、ゆーみん、ぬっちー、トリ夫婦とヨリトモだって居るのにさあ」
「みんなの好意に甘え続ける訳にはいかないだろ。お前だって、秋には編入学試験なんだから」
「そりゃ、そうだけどさ」
見ているうちに、動物たちと遊び続けるましろの動き方が派手になってきた。頭の上に子猫を乗せ、背には子犬を抱え、芝生の上を飛び回っている。
「あー、いいなー。あたしもあんな風に、毛でふさふさのお腹とか肉球とか耳とかぷにぷに撫で撫でしてみたーい。ね、ユウ。あの輪の中に入ってみてもいい？」
「やめとけ」
「なんでさー」
「俺らと姫の貴重な愛の時間に割り込んで来るんじゃねぇ！　邪魔だ！　……とかって勢いで、牙剥かれて唸られて追い出されるのがオチだから」
「姫って……何よ」
「ましろがさ、ペットと心を通わせるコツがわかったらしくて。一種の術らしいんだけど、最近、どんな気分で何を考えてるのかほぼ言い当てられるんだ。それによると……どうもましろって、葦原町の動物たちの間でお姫様扱いされてるみたいで」
「四足の太転依の次は、四足の動物の頂点に立っちゃったんだ……」
「そういう星の下に生まれてるんだろ、うちのヨメさんは」
憮然として、言う。
「……ねえユウ。あんた、ちょっと嫉妬してない？」
「何で僕が動物ごときに嫉妬しなきゃいけないんだよっ」
「ごとき、とか見下して言ってる時点で嫉妬してるのバレバレじゃんか。僕もましろとお日様の下でいちゃいちゃラブラブしたいのにー、とか思ってんじゃないの？」

「……」
「否定しなさいよ、あんた」
「ああー、ましろにバイトなんか勧めなきゃ良かったかなー」
「あはは、確かに。人間社会とのギャップを埋めるどころか、これじゃますます普通の人間から遠ざかっちゃってるもんね」
「いや？　そっち方面はすごく成果があったよ。……ましろには言ってないけど」
「？　どういうこと」
裕理から答えが返ってくるまで、若干の間があった。
「……僕ら、人間関係に恵まれすぎてたからさ」
真剣な顔で、話し始める。
「親父は顔が広いし、美冬さんは大抵のことを何とかしてくれる。アメリやゆみなちゃんはいい友達だし。玄造おじさんや多嘉山さんだって、最近はいろいろと融通を利かせてくれて……」
「そだね、いいことだよ」
「僕ら夫婦にとっては……特にましろにとっては、そうでもない」
アメリが眉を顰めたのを見て、裕理はさらに言葉を続ける。
「人間と太転依の共存、だなんてさ。デカいテーマを掲げてて……将来的には世界中を飛び回ることになるかもしれないのに、ちょっと前まで、僕とましろを取り巻く人間関係はすごく狭かったろ？　どんな大きな問題も、身内のナァナァで大抵は片付いちゃっててさ」
「……ユウが何言いたいのか、いまいちわかんない」
「春先に比べて、ましろの態度が変わりかけてたんだよ。人間と太転依の共存はもう実現したも同然だって、そんな雰囲気を言葉の端々に感じてて。私たちの常識が通用しない方が間違いなんだ、太転依や神通力の存在を受け入れられない人はいないんだって、そんな風にさ。……まあ、なんだかんだ言ってましろはまだ、この世に生を受けて日が浅いから。目の届く範囲が世界の全部だって思っても仕方ないけど、そういう傲慢は赤の他人ほど強く伝わっちゃうだろ」
「……」
「だいたい、ましろが毎日バイトに出かけるのを受け入れた時点で、本当は有り得ないだろ。この葦原町（まち）じゃ今も、中小の太転依と人間の間でいろんな問題が絶え間なく起き続けてるのにさ。あれって、気が緩んでた証拠なんだよ」
「それは……頼りになる仲間がいっぱいいるんだから、別にいいじゃん」
「だから。そうやって仲間に頼るばっかりじゃ、よくないだろ？」
「そりゃ、そうかもしんないけど……」
「この世には、太転依の存在をまだ知らない人がいる。僕らの仲間内のノリが通じない人たちがいる。葦原町でだけ共存が成立してても意味ないんだ。そういうのを、肌で感じて考えて欲しかったんだ。だから、バイトを勧めたって訳」
「……ユウのくせに、そんな小難しいこと考えてたんだ」
「まあね」
「で、上手く行ったんだ」
「うん。最近、テレビ局のインタビューとかやたら増えてきたんだけど、打ち合わせなしで引き受けても大丈夫だなって、そう思えるようになってきた。ましろはやっぱ頭いいし、よく気がつくよ。お世辞抜きで」

「ふうん……」
芝生の上で、大型犬と抱き合って転げ回るましろを見ながら、アメリは暫し考える。
「……ほんと、変わったよね」
「うん、ましろは変わってきた」
「違う。あたしが言ったのは、あんたのこと」
「僕？」
「何か、急にオトナになったよね。ユウはユウなんだけど、まるで別人。あたしよりずっと年上の雰囲気があるよ。まるで、マジメモードのユーディと話してるみたいだった」
「あー、そりゃそうだろな。だって、僕は……」
「？」
「あ、ごめん、何でもない」
「何よー。言いかけたんなら、最後まで言いなさいよー」
「こ、こらっ。胸ぐら掴むな。引っ張るな、揺するなっ」
その裕理とアメリの様子を傍目に見ると、ベンチの上で抱き合ってじゃれあっているようにしか見えないのだが――。
「くぉらあぁ――――――――っ!! そこの二人、何してるんですか――――――――っ!!」
案の定、嫉妬の炎を背中に背負ったましろに見とがめられた。神通力で生成した大槌（ハンマー）を片手に仁王立ち、鬼のような形相で裕理とアメリを睨み付ける。集まっていた動物たちが蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていく。
「うわ、この世で一番おっかない猛獣が吠えてる」
アメリが気付いて呟いた時には、もう裕理はその場に居なかった。「ご、誤解だって、誤解だよ！ そういうんじゃないってば！」と言い訳しながら走って逃げ出していて、ましろが大槌を振り回しながら追いかけ回す。とてもではないが、話が通じる雰囲気には見えない。
「……ほんとに、仲がいいんだから」
じゃれ合う幼馴染と親友の姿を苦笑しつつ見つめるアメリの目は、どこまでも優しかった。

〈了〉